

唐内侍省知内侍省事（上）

室 永 芳 三

目 次

序にかえて

- 一 知内侍省事に関する史料
- 二 知内侍省事の設置をめぐって
 - (1) 知内侍省事の設置とその性格
 - (2) 知内侍省事の活動とその役割
- 三 知内侍省事の兼職をめぐって（以下次号）
 - (1) 知内侍省事と神策軍中尉
 - (2) 知内侍省事と内枢密使
- 結びにかえて

序にかえて

唐後半期の政治史において、内侍省の宦官集団がもっとも有力な政治勢力の一つとして重要な役割を果たしていたことは、改めていうまでもないだろう。しかしそれがかかわらず、内侍省および宦官集団に関する研究はあまり進んでいるとは思えない。

いまここに論じようとする知内侍省事という職制についても、これまで概括的な説明は与えられているのではあるけれども、かならずしも明らかにされているとはいえないのである。即ち、知内侍省事は内侍省の諸職を総括する長官であり、知省事と略称されたこと、玄宗朝に高力士が右監門衛將軍（従三品職事）知内侍省事に補せられたことから、宦官の実力者はつぎつぎに三品將軍となり、宦官の政治勢力が形成されていったこと、また、内侍省の機構が改められ、長官として内侍監（正三品）が新たに設けられた後も、宦官実力者は内侍監などふりむきもせず、十二衛なかんずく監門衛の將軍号（従三品職事）を肩書きとする知省事にとどまって、内侍省におしこめられることを警戒したとするのである⁽¹⁾。

こうした知内侍省事に対する評価は、勿論、承認すべきものではあるが、これのみでは不十分であるように思えるのである。何故ならば、知内侍省事が内侍省においてどのような政治的な地位を占め、どのような役割を果たすことによって、内侍省の権力機構の展開に寄与したかが問われない限り、知内侍省事を十分に評価したことにはならないと考えるからである。

そこで小論においては、この点に着目し、唐後半期の各時期における知内侍省事の実態に迫ることで、内侍省の権力機構の一端を垣間みようとするものである。

一 知内侍省事に関する史料

知内侍省事に関する史料は極めて少ない。いわゆる内臣であるという史料上の制約より生じたものであろうが、同時に内侍省の官職としては正員ではなく、知内侍省事を名目とする職制であったことにも要因があると思われる。

いま、知内侍省事に関する記録を史書より検索してみると、ほとんどが就任の事実を告げるとどまって、その性格を窺うものは、管見の限り見出すことができないのである。そこでここでは、問題追求の焦点を、知内侍省事に補任せられた者の官歴にしぼり、その分析をふまえて、知内侍省事のもつ特質を概観してみたい。

そこで、玄宗朝から昭宗朝までの時期に、知内侍省事に補せられた者を、史書より抜き出し、それを整理してみると、次の表の通りになる。

知内侍省事表

始任年代	知省事	内侍官職	兼任諸職	備 註
玄宗 開元元年	○高力士	内侍	右監門衛將軍	通鑑卷二百十・開元元年秋七月条。冊府元龜卷六百六十五・内臣部・恩寵「天宝十四載、爲内侍省内侍監、秩正三品」
※開元十三年	楊恩昂	内侍	驃騎衛大將軍 左驍衛大將軍	唐長安城郊隋唐墓・楊恩昂碑。
※開元十四年	黎敬仁	内侍	右監門衛將軍	冊府元龜卷六百六十二・帝王部・命使。
肅宗 至德二載	魚朝恩	内侍	左監門衛將軍	新唐書卷二百七・魚朝恩伝。旧唐書卷十一・代宗本紀・永泰二年八月「以開府儀同三司・右監門衛大將軍・觀軍容宣慰処置使・神策軍兵馬使魚朝恩、加内侍監」
代宗 宝応元年	朱光輝	内侍	不明	通鑑卷二百二十二・宝応元年四月条。
宝応元年	程元振	内侍	右監門衛將軍	冊府元龜卷六百六十五・内臣部・恩寵。
※永泰元年	○劉清潭	内侍	左監門衛將軍	貞元新定教目録卷十五。冊府元龜卷六百六十七・内臣部・恣横「劉清潭爲内侍監」
大暦七年	董秀	内侍	冠軍大將軍 左衛將軍	冊府元龜卷六百六十五・内臣部・恩寵。旧唐書卷一百十八・元載伝。
※代宗朝	孫知古	内侍	右領軍衛大將軍	全唐文卷四百九十八・權德輿撰・孫崇義碑。
※德宗 貞元四年	王希遷	不明	右神策軍使 鎮軍大將軍 右監門衛將軍	貞元統開元教目録卷上。
貞元十二年	竇文場	不明	左神策軍中尉 左監門衛大將軍 左街功德使	冊府元龜卷六百六十七・内臣部・將兵。貞元新定教目録卷十七。
貞元十二年	霍遷鳴	不明	右神策軍中尉 右監門衛大將軍 右街功德使	冊府元龜卷六百六十七・内臣部・將兵。貞元新定教目録卷十七。

※ 貞元十五年	馬 承 倩	内 侍	左右監門衛將軍	貞元新定釈教目録卷一。旧唐書卷一百四十二・王武俊伝。
貞元二十年	△ 孫 榮 義	内 侍	右神策軍中尉 右驍衛將軍 右街功德使	全唐文卷四百九十八・權德輿撰・孫榮義碑「元和元年冬十月。内省少監致仕」
貞 元 末	薛 盈 珍	内 侍	右神策軍中尉副使	冊府元龜卷六百六十九・内臣部・將兵。
順宗 永貞元年	俱 文 珍 (劉貞亮)	不 明	右衛大將軍	旧唐書卷一百八十四・俱文珍伝。
憲宗 元和元年	吐突承璀	内 常 侍	軍器庫使 左監門衛將軍	冊府元龜卷六百六十五・内臣部・恩寵。 旧唐書卷百八十四・吐突承璀伝「俄授左神策軍中尉兼左街功德使」
元和二年	第五国珍	不 明	右神策軍中尉 右監門將軍 右街功德使	冊府元龜卷六百六十五・内臣部・將兵。
元和四年	李 輔 光	内 侍	左武衛大將軍	金石萃編卷百六・崔元略撰・李輔光碑。
元和五年	○ 程 文 幹	内 侍	右神策軍中尉 右監門衛將軍 左街功德使	冊府元龜卷六百六十七・内臣部・將兵。 「程文幹爲内侍省監・知省事」
元和六年	彭 猷 忠	内 侍	左神策軍副使 雲麾將軍	文苑英華卷九百三十二・張仲素撰・彭猷忠碑「至十月・遷左領軍衛大將軍・知内侍省事充神策軍中尉兼左街功德使」
※ 元和九年	崔 潭 峻	内 常 侍	不明	冊府元龜卷百六十五・帝王部・招懷。
元和十三年	梁 守 謙	内 常 侍	右神策軍中尉 右監門衛大將軍 右街功德使	冊府元龜卷六百六十七・内臣部・將兵。 金石萃編卷百七・楊承和撰・梁守謙碑。
元和十三年	馬 存 亮	内 侍	左神策軍副使 左監門衛將軍 雲麾將軍	全唐文卷七百十一・李德裕撰・馬存亮碑。 冊府元龜卷六百六十七・内臣部・將兵「長慶中。爲左軍中尉」
元和十四年	△ 劉宏規	内 常 侍	樞密使	全唐文卷七百十一・李德裕撰・劉宏規碑「遷忠武將軍・内侍少監」。冊府元龜卷六百六十七内臣部・將兵「敬宗即位。爲左神策軍中尉」
文宗 太和元年	王 守 澄	内 侍	左右神策軍中尉 驃騎大將軍 右衛上將軍	冊府元龜卷六百六十五・内臣部・恩寵。
太和六年	○ 仇 士 良	内 侍	右神策軍副使 右領軍衛將軍 内外五坊使	全唐文卷七百九十・鄭薰撰・仇士良碑「九年五月，拜左神策軍中尉兼左街功德使・將軍・知省事如故。中略。会昌三年。除内侍監」
※ 武宗 会昌四年	仇士良兒	内 常 侍	不明	入唐求法巡礼行記卷四・会昌四年六月条。
※ 宣宗 大中七年	王 元 有	内謁者監	右街功德使	金石萃編卷百十四・定慧禪師碑。

※ 大中十一年	崔巨源	不明	右監門將軍	旧唐書卷十八・宣宗本紀・大中十一年六月条。
大中十一年	王帰長	内常侍	内枢密使	旧唐書卷十八・宣宗本紀・大中十一年七月条。
昭宗 景福二年	呉承泌	内侍	左領軍衛上將軍 内枢密使	金石萃編卷百十八・裴延裕撰・呉承泌碑。

※ 始任年代不明のもの。○内侍監になったもの。△内侍少監になったもの。

この表より、知内侍省事に補せられた者の始任時期の官歴をみるならば、次の二点が注目されよう。一つは、知内侍省事の選任は、創設期の玄宗朝から肅宗・代宗二朝を経て徳宗朝に至るまで、内侍省の官歴の頂点にある内侍（従四品上）が補任されているが、つづく憲宗朝からは、内常侍（正五品下）あるいは内謁者監（正六品下）を任用する事例が散見するようになることである。もう一つは、知内侍省事のおびる諸職であるが、圧倒的に監門衛など十二衛の將軍号が多いものの、徳宗朝からは、新たに神策軍中尉、功德使、軍器庫使、内外五坊使、枢密使などを兼職するようになってきていることである。

前者については、創設期からの選任の方針が、憲宗親政下の時期に、何らかの理由で変化してきたことを示すものであり、それがいかなる理由によるものかということの検討が必要となるであろう。

また後者については、知内侍省事の兼職の変質過程を、内侍省への権力集中という構図に敷衍するならば、知内侍省事のもつ特質はより鮮明になるはずである。

そこで以下の各節では、以上のことを念頭に置きながら、さらに詳しく検討し、知内侍省事の実態に迫りたいと思う。

二 知内侍省事の設置をめぐる

（1）知内侍省事の設置とその性格

内侍省に知内侍省事の職が置かれたのは、玄宗が高力士をこれに任じた時からである。新唐書卷二百七・高力士伝に、

玄宗在藩。力士傾心附結。已平韋氏。乃啓属内坊。擢内給事。先天中。以誅蕭・岑等功。為右監門衛將軍・知内侍省事。

とみえるのが、それである。資治通鑑によると、これを開元元年秋七月のこととし、胡三省は、

知内侍省事。自此始。

と記している⁽²⁾。

高力士は、玄宗に仕えた宦官としてはもっとも有名である。玄宗の皇太子時代から近侍し、心を傾けて奉じて、内給事に拔擢され、玄宗即位の先天中には、岑義・蕭至等の誅殺に功があつて、右監門衛將軍・知内侍省事となつたのである。同書には、これにつづけて、
於是。四方奏請。皆先省後進。小事專決。

とみえ、また、資治通鑑卷二百十三・玄宗・開元十九年春正月壬戌の条には、

高力士。尤為上所寵信。嘗曰。力士上直。吾寢則安。故力士多留禁中。稀至外第。四方表奏。皆先呈力士。然後奏御。小者力士決之。勢傾内外。

とみえているから、これより高力士が玄宗の信任を一身にあつめ、つねに側近に親侍して、枢機を参掌するようになっていったことを知るのである⁽³⁾。

では、高力士が補任された知内侍省事の職は、内侍省の官制にあつては、どのように位置づけられていたのであろうか。このことについては、資治通鑑卷二百十・玄宗・開元元年秋七月己巳の条の知内侍省事に関する胡註に、

内侍省。内侍四人。以久次一人。知省事。従四品上。

とみえ、内侍省の内侍四人のうち、久次の一人に省事を知せしめたとあるから、知内侍省事は内侍の首席の地位にあり、内侍省の最高責任者であつたことになる。なお、従四品上という品階が附記されているが、これは本官たる内侍の官品で、内侍をもって補任されたことによる。

内侍は、「内侍は長官」⁽⁴⁾といわれる如く、内侍省の官職の最高位にあつたが、唐初以来、その地位は低く抑えられて、三品官に登ることはなかったのである。さきの知内侍省事の記事に、高力士が「右監門衛將軍・知内侍省事」といった形で、右監門衛將軍（従三品職事）の官名を付与されているのは、この三品將軍号の肩書きを寄祿官として帯びていたことを示すものであつた。

さて、知内侍省事が、内侍省の最高責任者であり、内侍四人のなかから一人を選んで、その職に補すというものであるとすると、ここに一つの問題が残ることになる。それは、この玄宗の開元年間、知内侍省事に補せられた者が、高力士一人のみとは限らなかったという事実である。前節に掲げた「知内侍省事表」によっても明らかのように、玄宗の開元年間には知内侍省事に補せられた者は、高力士の他にも、楊思勗・黎敬仁の名がみえているのである。

楊思勗・黎敬仁兩人の始任年代は、明確に記す史料がなくて不明であるが、高力士につづいて、内侍をもって知内侍省事に補任されたもののようである⁽⁵⁾。とすれば、楊思勗・黎敬仁が帯びた知内侍省事とは、何であつたかということになる。

そこで、その実態を探るうえで興味深い史料を取り上げて検討してみることにする。その史料とは、山右石刻叢編卷六に収録されている開元十七年九月の玄宗御撰にかかる「大唐龍角山慶唐觀紀聖碑陰」である。この碑陰には、四列の題名があり、皇太子・皇族および省寺長官の列名がみえるが、最後の第四截の題名のなかに、

驃騎大將軍兼左驍衛大將軍員外置同正員□内侍上柱国虢国公楊思勗

冠軍大將軍守右監門衛大將軍知内侍上柱国渤海郡開国侯高力士

冠軍大將軍行右監門衛大將軍員外置同正員知内侍上柱国上党県開国侯黎敬仁

とあつて、楊思勗・高力士・黎敬仁の三人が列記されている。なお、ここには知内侍省事の職名はみえず、「知内侍」と記されているにすぎないが、この「知内侍」が知内侍省事を指すものであることは、近年、西安市郊外から出土した邢琇撰の楊思勗墓誌銘のなかに、

驃騎大將軍兼左驍衛大將軍知内侍事上柱国虢国公楊公

とあつて、「知内侍事」と記されていることから確められるのである。

さて、この碑陰の題名にみえる高力士・楊思勗・黎敬仁の官銜のうち、とくに注目すべ

きは、知内侍省事を示す「知内侍」の肩書に、楊思勳には「員外置同正員口内侍」とあり、黎敬仁にも「員外置同正員知内侍」とあって、「員外置同正員」の名が付記されており、高力士にのみ、それが記されていないことである。員外置同正員という肩書は、いわゆる同正員の員外官であることを示している。とすれば、「知内侍」とのみ記されている高力士は正官であったことになる。ことばをかえれば、知内侍省事を帯した内侍には、正官の他に、員外官の内侍からも補任されたことになる。

官制上、正官は員外官とは明確な一線を画していた。通典卷一九・職官総論の員外に関する原註に、

其加同正員者。唯不給職田耳。其禄俸賜。与正官同。单言員外者。則俸禄減正官之半。とあって、員外官には、同正員と員外官との二種があり、同正員は正官と同じ俸禄が与えられて、ただ職田が給せられないだけであるのに対し、単なる員外官は俸禄も正官の半分であったのである。

六典によれば、内侍省に定められた正官は、内侍（従四品上）四人の他に、内常侍（正五品下）六人、内給事（従五品下）八人、主事（従九品下）二人の計二十人の本省職員、および管下の掖庭・宮闈・奚官・内僕・内府等五局の職員に流外の令史・書令史をすべてあわせても総定員四百一名であった⁽⁶⁾。これに対して、いわゆる員外官を中核とした定員外の宦官集団は莫大な数に及んでいた。新唐書卷二百七・宦者伝序には、

至中宗。黄衣二千員。七品以上員外置千員。然衣朱紫者尚少。

とみえ、中宗朝には、七品以上の品階を有する員外官が千人もいたとある。玄宗朝に入ると、その数はさらに増加して、資治通鑑卷二百四十三・敬宗・宝曆元年春正月辛亥の条の胡註に、

玄宗・天宝十三年。内侍省置高品一千六百九十六人。品官・白身二千九百三十二人。

皆羣阉也。

とみえるように、定員外の高品・品官・白身と呼ばれた総数四千六百三十八人の宦官集団が内侍省のなかにおったのである。このうち、いわゆる員外置同正員という員外官に補せられたのが高品層であった⁽⁷⁾。つまり、楊思勳・黎敬仁は、この高品層に属する宦官であったのである。

このようにみえてくると、高力士が帯びた知内侍省事の政治的地位が截然として、楊思勳・黎敬仁のそれと区別されるべき理由が明らかとなるのである。

（2）知内侍省事の活動とその役割

前節では、高力士が帯びた知内侍省事の政治的地位について言及したが、本節では、員外官たる楊思勳・黎敬仁が帯びた知内侍省事の性格について、その実態的な側面から検討してみたい。

まず、楊思勳・黎敬仁の両人が、どのような活動をし、そこにどのような傾向をみる事ができるかを検討してみる。

（a）楊思勳

その伝は両唐書に立てられているほか、近年、西安市郊外で出土した墓誌銘もある。楊思勳は、宦官でありながら珍らしく、玄宗一代を通じて軍事方面に著功を立てた人物であった。なかでも、玄宗に従って韋氏誅殺に功があつてより、玄宗の信任を得たもの

のようで、開元初年には、内常侍・右衛門衛將軍に累遷しているのである。その人となりは、「思勗有臂力。残忍好殺」といわれているが⁽⁸⁾、それだけにまた、軍事面における活動はめざましかった。彼の墓誌銘によると、開元十年の安南蛮討伐の功によって、内侍をもって鎮軍大將軍（從二品）を授けられ、同十二年の溪州蛮討伐では、功により輔国大將軍（正二品）虢国公を加えられ、さらに翌十三年には、封禪の儀に従って、とくに驃騎大將軍（從一品）を賜わっているのである。

(b) 黎敬仁

その伝は詳らかでない。史料不足のためもあるが、その官歴も不明であるが、冊府元龜卷百四十七・帝王部・恤下・開元十四年七月の条に、

以懷鄭許滑衛等州水潦。遣右監門衛將軍・知内侍省事黎敬仁宣慰。如有遭損之處。應須當助賑給。云云。

とあり、また、同書卷百六十二・帝王部・命使・開元十六年九月の条に、

詔曰。河南道宋亳許仙徐鄆濮兗州奏旱損田。宜令右監門衛大將軍黎敬仁往彼巡問。如有不支濟戶。應須賑恤。云云。

とあることによって、勅命を奉じてしばしば出使していたことを知るのである。

さて、楊思勗において注目されるのは、異常ともいえる昇進の速さであり、その位階の高さである。驃騎大將軍の位階は、資治通鑑卷二百十六・玄宗・天寶七載夏四月辛丑の条の胡註に、

唐制。勳階二十九。驃騎大將軍為之首。從一品。

とある如く、勳階の頂点であった。いま、比較の対象として、先掲の「大唐龍角山慶唐觀紀聖碑陰」の開元十七年の題名にみえる宰相と知内侍省事の官衛の官品を参照してみると、

銀青光祿大夫（從三品）守兵部尚書（正三品）兼中書令（正三品）蕭嵩

中大夫（從四品下）守中書侍郎（正四品上）同中書門下平章事裴光庭

中散大夫（正五品上）守黃門侍郎（正四品上）同中書門下平章事宇文融

とみえる宰相の官品に対して、知内侍省事の三人は、

驃騎大將軍（從一品）兼左驍衛大將軍（正三品）員外置同正員口内侍楊思勗

冠軍大將軍（正三品）守右監門衛大將軍（正三品）知内侍高力士

冠軍大將軍（正三品）行右監門衛大將軍（正三品）員外置同正員知内侍黎敬仁

とみえているのである。知内侍省事が正三品の驍衛あるいは監門衛の大將軍を兼職としたことは、いまはおくとして、宰相とその官品を比べてみると、いかに位階が高かったかが明らかとなる。そして何よりも、楊思勗の位階の高さが目につくのである。資治通鑑卷二百十七・玄宗・天寶十三載十一月己未の条の胡註に、

楊思勗以軍功。高力士以恩寵。皆拜大將軍。階至從一品。猶勳官也。

とみえ、楊思勗は軍功をもって、高力士は恩寵をもって、從一品の大將軍を拝したとあるが、高力士が勳官從一品の驃騎大將軍を加えられるのは、天寶七載に至ってからのことである。楊思勗に遅れること二十三年後であった。楊思勗が、玄宗の恩寵と信任を一身に集めていた高力士に先立って、勳官從一品の驃騎大將軍を与えられていたことは、黎敬仁が高力士と同じ位階の優待を得ていたことと連関して、注意しておきたい。確かに、勳官の位階の高さ自体は、地位の上下と本俸の多少との指標にすぎないかもしれないが、玄宗が知内侍省事のそれぞれに、どのような位階を与えるかは、とりもなおさず、その知内侍省

事を、どう認識していたかを示すものに外なるまい。

ともあれ、楊思勗の職掌の特徴は軍事にあったようであり、黎敬仁のそれは、いわゆる奉使であったようにみえる。しかし、軍事や奉使に活躍した宦官は、他にも数多くいる。唐文拾遺卷四十三・崔致遠・上太師侍中状に、

渤海。開元二十年。怨恨天朝。將兵掩襲登州。殺刺史韋俊。于是。明皇帝大怒。命内使・高品何行成・太僕卿金思闌。發兵過海攻討。云云。

とあって、開元二十年に將兵を領して渤海征討に赴いた内使・高品の何行成の事例、また、冊府元龜卷百六十二・帝王部・命使・開元十五年三月の制に、

河北遭水処。中略。朕居黃屋。念在蒼生。每思優養。無忘鑒寐。今故遣中使・左監門衛將軍李善才。重此宣慰。云云。

とあって、勅命を奉じて河北に出使した中使・左監門衛大將軍の李善才の事例などは、その一例である。

従って、ここではその職掌内容が問題なのではなくて、楊思勗・黎敬仁がともに、その活動の範囲を、内侍省の責任者としてのそれに限定されず、むしろ軍事や奉使が基本的な職務のように活動しているということに意味があるのである。つまり、員外官の内侍をもって、知内侍省事を帯びた楊思勗・黎敬仁の職掌の傾向性、あるいは共通する特徴的な点をあげるならば、内侍省よりの出使であったといえよう。

周知の如く、玄宗は即位当初より自らの指導性を徹底させるために、好んで宦官を登用した。資治通鑑卷二百十三・玄宗・開元十八年十一月の条の胡註に、

明皇。不以閹人殿國師為辱。而又寵秩之。

とみえる如くである。そして宦官の登用は、さまざまな分野に及んでいたことは、旧唐書卷百八十四・高力士伝に、

玄宗尊重宮闈。中官稍稱旨。即授三品將軍。門施檠戟。故楊思勗・黎敬仁・林招隱・尹鳳祥等。貴寵与力士等。楊則持節討伐。黎・林則奉使宣伝。尹則主書院。其餘孫六・韓莊・楊八・牛仙童・劉奉廷・王承恩・張道斌・李大宜・朱光輝・郭全・辺令誠等。殿頭供奉・監軍・入蕃・教坊・功德主当。皆為委任之務。云云。

と評されている如くであって、玄宗は内侍省の宦官を重用し、自らの意にかなう者があれば、ただちに三品將軍の官位を授けたという。その恩沢をこうむった者に、高力士・楊思勗・黎敬仁・林招隱・尹鳳祥がおり、このうち、楊思勗は「持節討伐」を掌り、黎敬仁と林招隱の二人は「奉使宣伝」を掌り、尹鳳祥は「主書院」となったとある。さらに、これ以外にも、「殿頭供奉・監軍・入蕃・教坊・功德」などの職務を宦官たちに掌らしめたというのである。ここにみえる三品將軍の官位を得たという高力士・楊思勗・黎敬仁・林招隱・尹鳳祥の五人のなかで、林招隱については不明であるが、尹鳳祥については、山右石刻叢編卷六・開元十七年九月・「大唐龍角山慶唐觀紀聖碑陰」の題名のなかに、

銀青光祿大夫行内侍省内侍員外置同正員上柱国尹鳳祥

とあって、員外置同正員の内侍ではあったが、知内侍省事は帯びていなかったことがみえている。そうであれば、「奉使宣伝」に関しては、黎敬仁が首席たる知内侍省事として総括していたと思われるのである。

以上を要するに、楊思勗と黎敬仁が帯びた知内侍省事が示している政治的地位は、内侍省より出使して、「持節討伐」あるいは「奉使宣伝」の分野に活動する宦官集団を、それぞれ

れ総括する長官であったといえる。さらにいえば、既存の内侍省の機構のなかに、「持節討伐」および「奉使宣伝」を総括する知内侍省事の権力機構が、別個に形成されていたという、玄宗朝に特徴的な内侍省の構造を垣間みることができるのである。

玄宗の治世の末年、天宝十三載に及んで、内侍省の機構に改革が加えられた⁽⁹⁾。新唐書卷四十七・百官志に、

内侍省監二人・従三品。少監二人。内侍四人。皆従四品上。

とあり、その註には、

天宝十三載。置内侍監。改内侍曰少監。尋更置内侍。

とあって、長官として内侍監を設け、もとの内侍を少監とし、新たに内侍を増員したのである。

内侍省の機構改革は、玄宗の即位当初から、すでにその意志の片鱗が窺えるのである。開元初年に、内侍二人を増員して、新たに内侍四人の体制をとったこと⁽¹⁰⁾、知内侍省事を創設して、正官の高力士と員外官の楊思勗・黎敬仁の三人体制をとったことなどをみても、内侍および知内侍省事各職が体系的に整備される必要があったと思うのである。その滞積しつつきてきた機構の整備の問題が、この時期に至って、内侍省監、少監、内侍の職制として整備されたとみることができるであろう⁽¹¹⁾。

新唐書卷二百七・高力士伝には、

初置内侍省監二員。秩三品。以高力士・袁思芸為之。

とあって、内侍省監には、高力士と袁思芸が任じられたことがみえている。内侍省監は、立派な正三品の職事官であって、内侍省における最高の官職であり、とくに誠忠をつくせる知内侍省事高力士の功績に報いたものであった⁽¹²⁾。このとき、袁思芸もともに就任しているが、彼が内廷に奉仕したのは、高力士に比しておそく、天宝に入ってからであって、かつ知内侍省事に補せられてもいないので、高力士が首席の地位にあったものと考えられるのである⁽¹³⁾。

ともあれ、内侍省監の創設には、いろいろ問題がある。「表面的には宦官が三品職事官を寄祿官としてではなく手中にしたかに見えるが、実情は宦官を内侍省に追い帰し、政界での実権を自己の手中にしようとした楊国忠らの画策であったのではないかと思われる」⁽¹⁴⁾という見解もある。しかし、その内容の具体的な姿は確めようもないままに、時の政界は急速に安祿山の反乱へと転換をはじめるのである。この後の内侍省の機構と性格の変化、内侍省監および知内侍省事の職制が、現実にはいかに機能・運用されたか、そのようなことについては、節を改めて詳述することとする。

(本稿は、昭和63年度長崎大学教育研究特別経費による研究成果の一部である。)

註

- (1) 横山裕男「唐の官僚制と宦官—中世の側近政治の終焉序説—」(『中国中世史研究』東海大出版会)。
- (2) 資治通鑑卷二百十・玄宗・開元元年秋七月己未条。同書卷二百十六・玄宗・天宝七載夏四月辛丑条参照。
- (3) 資治通鑑卷二百十一・玄宗・開元元年冬十月乙巳条参照。
- (4) 旧唐書卷百八十四・宦官伝序。
- (5) 資治通鑑卷二百十二・玄宗・開元十年秋八月条参照。

- (6) 池田温他編「六典所掲開元職員一覧表」参照。
- (7) 拙稿「唐代内侍省の宦官組織について―高品層と品官・白身層―」（『日野開三郎博士頌寿記念論集』中国書店）
- (8) 旧唐書卷百八十四・楊思勗伝参照。
- (9) この時期については異説がある。旧唐書卷百八十四・高力士伝では、天宝十四載といい、同書卷四十二・職官志では、天宝十三載十二月という。また、唐会要卷六十五、および資治通鑑卷二百十七では、同十三載十一月とする。いま、一応これによった。
- (10) 通典卷二十七・職官・内侍省。
- (11) 註(7)論文参照。
- (12) 資治通鑑卷二百十七・玄宗・天宝十三載十一月己未条胡註参照。
- (13) 新唐書卷二百七・高力士伝参照。
- (14) 註(1)論文参照。